

# 笑顔 前向きに

阪神震災  
16年

## ハイチ被災者と交流

「自分をこれからも愛し続けたい」。1年前のハイチ大地震で右脚を失ったハイチ人女子学生ガエル・エズナールさん(18)が16日、神戸市を訪れ、阪神大震災で後遺症を負った震災障害者と交流した。政情が不安定で、復興への歩みが遅いハイチで前向きに生きようとするエズナールさんを、日本の震災障害者は「笑顔があるから大丈夫」と勇気づけ、思いを分かち合った。

ハイチで義肢支援を続けている国際医療救援団体「AMDA」(岡山市)の招きで来日した。回国では地震によって脚や腕を切断した被災者が4000人以上いるという。

昨年1月12日夕のハイチ大地震発生時、エズナールさんは家族4人で暮らす4階建ての自宅アパートで知人の赤ん坊の面倒を見ていた。激しい揺れにアパートは崩壊、がれきの

下敷きになった。「助けて!」と叫び続け、夜の11時ごろになってようやく兄らに救出されたが、赤ん坊はひざの上で亡くなっていた。病院に搬送され手当を受けたが、目覚めた時には右脚は切断されていた。コンクリートのがれきで押しつぶされたためだったが、ショックのため泣き続

### 片脚失った18歳来日

この日の交流会には、日本の震災障害者8人と家族らが参加。はじめは緊張していたエズナールさんも次第にうち解け、「生きているのは神様のおかげ。人生を楽しみたい」と笑顔を見せた。エズナールさんは同じ境遇の震災障害者に、どのようにシヨッ

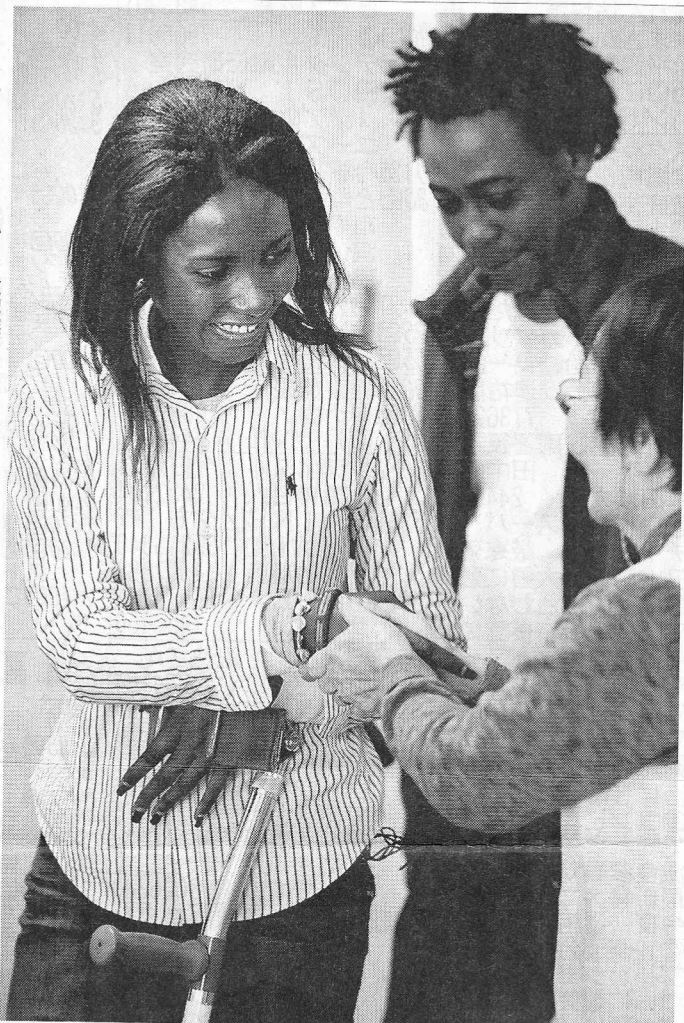
クを乗り越えてきたのかを質問。震災で次女が障害を負った大川和彦さん(46)は「震災は強く生きる原点の目と目には変えられれると思えるようになった」と娘と歩んできた体験を踏まえて激励した。エズナールさんが「地震は忘れられないが、自分を愛し続けます」と応じると、会場から拍

手が湧き起こった。エズナールさんは交流後の記者会見で「神戸はみんなが一つになって街を建て直したと聞いた。ハイチでもみんな支え合いたい」と語った。

長女が障害を負った城戸美智子さん(58)は「自分を愛せる人が一番強い。あの子は大丈夫」。両脚が不自由な甲斐研太郎さん(62)は「世界中に同じ境遇の

人がいる。自分だけではないと感じてもらいたい」と話した。エズナールさんは17日、神戸市中央区の東遊園地を訪れ、阪神大震災の犠牲者を追悼する。

【川口裕之、吉川雄策】



ハイチ大地震で右脚を失ったガエル・エズナールさん(左)。阪神大震災の震災障害者と握手して笑顔を見せた16日、竹内紀臣撮影